

音

の

ま

に

ま

に

11 Music Life ELEVEN

今回は、私の好きな民族音楽のドキュメント映画をご紹介します。リズムは、その国の持つ文化そのもの。海外の映画祭に行くと、ミュージシャンでなくとも、一般人さえもダンスタイムには、その国の民族的リズムを感じさせてくれる。お国柄のリズムを刻む人を見る、その瞬間が至福のときだ。



木村奈保子

映画評論家、作家、演出家、NAHOK デザイナー。京都外大卒業。CBC局アナから映画評論家へ転身。ゴールデンタイムの映画解説を17年間勤め、同時に演出家としてテレビ番組やファッションビデオの制作や、著作、講演なども多数手がける。昨今は、映画音楽の演奏活動やプロデュース、ダンス舞台の演出ほか、画期的な楽器ケースを研究開発、デザイン。文化的かつ、アントレプレナー（企業家）の資質で活躍する。
www.kimuranahoko.com/

伝統音楽を伝える民族音楽家たちの魅力

サルサを愛する私の好きな音楽ドキュメントは、まず「ミュージック・クバーナ」(2004年キューバ)。キューバの音楽家が登場するドラマ仕立ての音楽映画である。キューバに住むタクシードライバーは、ミュージシャン、ピオ・レイバさんの大ファン。未来のバンドマネージャーになることを夢見て、ピオと組ませる若いバンドメンバーを探していく展開だ。

「ブルース・ブラザーズ」のように、ひとり、ふたり、と異世代の凄腕ミュージシャンを選んで決定していくさまがリアルなドキュメントタッチで撮られ、ミュージシャンが登場人物だけに、ワクワクするような異世代サウンドがクリエイトされていく。キューバは、生まれながらのミュージシャンがストリートにあふれ、音楽は生活から切り離せないという民族性。まるで太鼓が入っているかのようなリズムカルな肉体は、まさに民族の血そのものだ。

やがてピオは、見事なパワーを放つ若い女性シンガーに一目惚れして、新バンド結成に積極的に取り組む。キューバ文化の歴史を背負ったピオ爺が若者に与えるものは何なのか？

マネージャーのタクシードライバーは、キューバ旅行にやってきた日本人と見れば、声をかけ、日本で公演をやりませんか、とアプローチし続ける。彼らの目から見た日本人は、能面の地味でおとなしい、お金持ち、スポンサーらしい。自分の国の音楽家を支えるのは、お金持ちの“日本人”だと思いついて入っているのだ。この現代日本人像はちょっと情けないが、キューバ音楽の実力には抗えない敗北感だ。

さて、彼らのバンドに東京公演のチャンスは訪れるのか？

古き良き時代のキューバ音楽を甦らせた“ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ”は、1910年頃、ネンゴ、チャンギー、キリバナなどのリズムが組み合わせられた「ソン」のスタイルで、キューバの東部、オリエンテで誕生。アメリカで“ルンバ”として、世界に広められた。

ハリウッド映画音楽も、ラテンテイストのアレンジが多く、まさに音楽ルーツを探る旅となる。映画公開決定後、ピオは88歳でこの世を去った。キューバ音楽の歴史に敬意を持つ制作者の姿勢がにじみ出る音楽映画の傑作だ。

ピオ・レイバ爺さんの存在、人生そのものが“音楽”なのだ。

つづいて映画「RIZE」(2005年アメリカ)は、ロス暴動の始まりとなったサウスセントラル地区を舞台に、怒りを“ダンス”にぶつける若者たちのさまを描いた、衝撃的な映像ドキュメント。

LAはハリウッドセレブの世界だけで構成されているわけではない。

オリヴァー・ストーン制作の、「サウスセントラル／非情の街」(1992年アメリカ)は、殺人罪で服役した主人公が出所したとき、ギャングの手先となっていた自分の息子を命がけで救うという父子の実話をドラマチックに見せた。犯罪に手を染めずとも、ただ道を歩くだけでも、殺されかねない、そんなスラム街の状況で、子どもたちがいかに生き抜くのか？

今作は、貧困と暴力のこの街で、ピエロの扮装をして踊り、パーティを盛り上げる仕事を始めた主人公、トミー・ザ・クラウンが、アフリカ民族ならではの独特のリズムカルなダンスを広め、子どもたちに夢を与えていく過程を見せる。

素晴らしいのは、このトミーが、ダンスを教えながら、すべての家庭の父親になりかわって、「犯罪にかかわるな、それよりも踊れ」、としつこくうるさく叫び続けることである。視点のある写真家が撮影しただけあって、メッセージ性が強い。

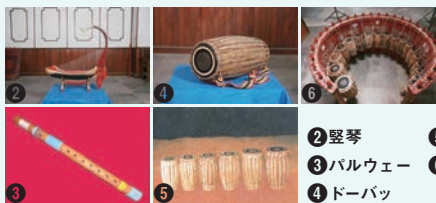
ここが、ただの記録撮影ビデオではなく、優れたドキュメント映画になりえたポイントだろう。やがて、クラウンのダンスに対抗する“クラブダンス”が登場し、二大派閥に分かれたダンスチームがステージで競うシーンまで、これがドキュメントなのかと驚くほどショーアップされており、出演者の息をもつかせぬダンステク含め、名監督の演出力を超える迫力だ。

踊らなければ、死ぬしかない……民族の血を引く肉体のリズムと強い怒りが重ね合わさり……そして神に魂の贖罪を求めるダンス、となればもはや、ちゃらついた若者文化とは無縁だろう。

タイトルの「RIZE」は、這い上がること。逆境のハングリーさこそパワーであり、人間のエネルギーの根源となることを明示する意味深いダンス・ドキュメント。日本の無気力な若者たちに、あえて見せたい作品である。



Beauty of Tradition
 ミャンマー民族音楽への旅
 [監督] 川端 潤
 [出演] ウー・セイウィン・チョウ ほか
 [公式HP] <http://www.airplanelabel.com/myanmar/movie.html>
 2015年/ミャンマー/カラー/105分
 6月27日より、ポレポレ東中野にてレイトショー!
 (株)株式会社プロジェクトラム



② 竖琴 ⑤ チャウロンパ
 ③ パルウェー ⑥ サインワイン
 ④ ドーパツ

また、土着民族の音楽こそがホンモノ、といえる、究極の音楽ルーツを見せる「モロノブラジル」(2000年フィンランド)もアート監督らしい見せ方がある。

「レニングラード・カウボーイズ・ゴー・アメリカ」(1989年フィンランド)でおなじみフィンランド出身のアキ・カウリスマキの兄、ミカ・カウリスマキ監督が、ブラジルへの熱い思いから撮った、このドキュメント映画は、先住民インディオを中心にブラジルの生活を描くもの。彼らの魂の音楽と踊りを通じて、カンドンブレなる宗教、カポエイラなるアフリカの武術など、神との対峙、苦悩からの脱皮といった、多くの映画に描かれるエンタテインメントの源をどっぷりと見せる。そこには民族の歴史が深く刻まれ、怒りや悲しみを背負う人々の叫びとエネルギーが熱い音を放ち、どこまでもハートを突き刺す。モロノブラジルとは、「ブラジルで暮らしている～」の意味。ミカ監督は音楽のルーツに触れて、ここに移り住んでいる。何度も見たい、ホンモノの音楽がある傑作だ。

そして、新作映画「Beauty of Tradition ミャンマー民族音楽への旅」(2015年ミャンマー)は、200年前から伝わるミャンマーの民族音楽を地元のミュージシャンの演奏と歌で録音しようと、珍しい楽器を紹介しながら、その練習風景をありのままに見せるドキュメンタリー。日本のスタッフが制作した。こちらは、演出がほほえないと思えるタッチで、ゆっくりと時が流れるなか、素朴な風貌の人々があらわれては、ユニークな音を出す。異国情緒にあふれている。民族音楽の楽器は、実にシンプルで、美しい。

映画「ビルマの竖琴」(1956、85年日本)の竖琴、サウン・ガウヤ、ミャンマーの笛、フネーも登場する。ワイルドで素朴なサウンドがかえって、新鮮だ。呼びものは、ミニシンバルのような21個の太鼓で構成されたサイン・ワインで、これを演奏する人が指揮者という。譜面はなく、耳でメロディを伝えつつ、アドリブが必須であり、かつ腕の見せどころというところは、ジャズのように。しかし、異なる楽器同士の合奏形態はない。同じメロディのユニゾンで強調し、ハーモニーもない。

これまでもCDやYouTubeでミャンマーの演奏を聞く機会はあったが、宗教とは切り離せないもので、神の存在を感じながら、壮麗な音を醸し出す迫力。演奏家の出で立ち、凛として神々しい。この独特のサウンドの基本が、本作にあるのかもしれない。

出演者は、主に大学で教える学士、生徒が多く、まじめでおっとりした趣きがあるものの、やはり私は、圧倒的に勢いのあるコンガ風太鼓の若者が印象的であった。

演奏と同じ立ち位置で、ミャンマーの民謡を独特のコブシで歌う女性はまだ若く、学生らしい。彼らにとって、楽器は決して歌の伴奏でもなく、

同じ目線でサウンドをクリエイティブしていく姿勢が明確にあるという。

これは、ミャンマーでなくとも、日本の音楽でも重要なポイントだろう。アイドル、歌謡スターを含めた音楽業界中心に、アマチュアでもカラオケごっこや、ジャズボーカルごっこの悪癖がついているせいで、歌う側と伴奏者の距離がある。歌い手だけが引き立てられるようなシステムは商業主義のたまものであり、音楽、アートとは異なるもの。演奏者は歌う人より確実にキャリアがあるのだが、伴奏でしかないという現状(もちろん、一部の本物歌手は別なのだが)。

これは、私もヴォーカルをやってきた身として、自責の念を込めて証明する。この感覚が私の場合、頭ではすぐにわかったのだが、なんと対応できる実力がないのだから残念。

音楽をクリエイティブということは、ひとりひとりが音楽的に同等の、あるいはそれに近い力を持ち合わせているものだとつくづく思う。“みんなでやれば、誰かがカバーしてくれて、わかりゃしない”と、たかをくくる時点で失格なのだろう。

それは、どんな学校の看板を持っているか、譜面の読み書きを得意とするかなどの権威や技術にかかわらず、ひたすら、個人のアート性に負うものだ。肩書社会では語れない、音楽の力はシンプルだが難しい。

何より、民族の音は、いくら他の民族が練習しても、歴史を背負う民族の音とは比較できない。伝統のサウンドが民族を表し、歴史に残る。

アウンサン・スーチーの政治家としての活動、民主化、海外企業の参入など、ミャンマーの転換期と思われる2015年に本作が公開されるのは、時代的にもタイムリーな題材といえよう。

民族音楽の魅力を広めたい、と願うのは、たとえ他国のものであっても、価値があり、本作は日本人の目から見た興味深い民俗学である。

願わくば、本作を映画的に考えると、最後に一同を集めた本格的な演奏会のような見せ場を作ること、またありのままを撮影したドキュメント映像のなかに、さらに作り手ならではの強いビジョンが見えれば、より作品的になったのではないかと思うのだが、どうだろう?

映像の風景としては、僧院や芸術大学、シュエダゴン・パゴダ、お正月の水かけ祭りといった文化的、観光要素もある。

民族音楽を扱う映画は、国の文化の一端が味わえるから、面白い。

キューバのように、現地ミュージシャンが参加する音楽ツアーなどが増えると、もっともっと海外の楽しみ方も増える。

かくして、世界の民族音楽にふれることは、自分の音の世界を広げることは確かだろう。



Information

NEWピンク登場!

こちらは、いままでNAHOKAmadeusシリーズに入らなかったほかのメーカーのハードケースが入るということで重宝されています。

各ケースに登場したピンク/リボンシリーズ、今回は新しい個性的なパールピンクをご紹介します。

若干紫がかっているのですが、クセのないすっきりした大人の可愛さがクセになりそうな、素敵なピンクです。



■NAHOK ドイツ製完全防水生地+湿度調整機能付きフルートケースガード
 [AMADEUS]パールピンク
 C管 希望小売価格: 22,680円
 H管 希望小売価格: 24,840円

■NAHOK ドイツ製完全防水生地+湿度調整機能付きフルート&ピッコロ横置き型(C管)ケースガード
 [Grand Master2] ヴァイオレット/白
 希望小売価格: 30,780円



www.nahok.com

NAHOK は、ドイツ製完全防水生地に、止水ファスナーを加え、さらに欧州輸入の耐衝撃、温度 & 湿度調整機能素材を挿入したMADE IN JAPANの逸品です。